

暖地における収量性や永続性に優れるトールフェスク新品種「九州 10 号」の育成

○桂 真昭・我有 満・後藤和美・松岡秀道・松浦正宏<sup>1)</sup>・長谷 健<sup>2)</sup>・上山泰史<sup>3)</sup>・  
大山一夫<sup>1)</sup>・佐藤信之助<sup>1)</sup>

(九州沖縄農研・<sup>1)</sup>九州農試・<sup>2)</sup>鹿児島農試大隅支場・<sup>3)</sup>東北農研)

【背景】

トールフェスクは寒地型イネ科牧草の中で最も環境適応性が高く、西南暖地の中・高標高地における基幹草種として利用されている。1960年代から始まった草地造成においてアメリカで育成された中生品種「Kentucky31」が導入されて以来、中生品種が広く活用されてきた。この状況を受け、「九州 10 号」は、西南暖地で問題となる永続性の改良に重点を置いて育成された中生品種である。既存の中生品種より収量性や永続性に優れることから、西南暖地の永年草地あるいは転換田、未利用農地等での活用が期待できる。なお、本品種の育成に関して、ご協力いただいた関係機関の各位に深謝いたします。

【育成経過】

国内自生集団および海外導入品種に由来する 93 選抜栄養系を育種材料とし、1985年から個体植えによる特性評価を実施し、越夏性および冠さび病等の耐病性に優れる 5 栄養系を選抜した。それらを用いて 1988年に合成 1 代種子を生産し、1989年には合成 2 代種子を生産した。この合成 2 代種子を用いて、1989年から 1992年に系統適応性および生産力検定試験（9 試験地）、冠さび病抵抗性検定試験、放牧適性検定試験（2 試験地）等を実施した。標準品種は「サザンクロス」を供試した。

【生育特性】

「九州 10 号」の定着時草勢は「サザンクロス」と同程度であり、草地造成は従来の方法で可能と考えられる（表 1）。早晚性は中生に属し、出穂は「サザンクロス」より 2 日早い（表 1）。年間乾物収量は、平均で「サザンクロス比」105 の多収品種である（表 1）。越夏後の再生程度は「サザンクロス」と同程度であるが、利用 3 年目の最終刈り乾物収量が「サザンクロス比」106 と高く、利用 3 年目の秋

の被度も「サザンクロス」より高いことから（表 1）、永続性は「サザンクロス」より優れると考えられ、この特性は、暖地において顕著である（図 1）。各種病害に対しては、「サザンクロス」と同程度かやや優れている（表 1）。乾物分解率が「サザンクロス」より低いが、放牧試験での年間乾物採食量は「サザンクロス」より多く、採食率は同程度であり（表 1）、その影響は小さいと考えられる。

以上のように、「九州 10 号」はこれまで広く利用されてきた中生品種より収量性や永続性に優れ、その特性は暖地でより発揮されることから、夏枯れや永続性が問題となっていた地域における活用が

表 1. トールフェスク「九州10号」の生育特性

特性	九州10号	サザンクロス	備考
定着時草勢 <sup>1)</sup>	6.6	6.3	9場の平均値
出穂始日	4月24日	4月26日	8場3年間の平均値
年間乾物収量(kg/a)	168.9	161.3	9場3年間の平均値
越夏後の再生程度 <sup>1)</sup>	5.9	5.8	9場3年間の平均値
利用3年目の最終番草乾物収量(kg/a)	22.9	21.7	9場の平均値
利用3年目の秋の被度(%)	83	76	7場の平均値
冠さび病抵抗性	中	中	特検での判定
冠さび病罹病程度 <sup>2)</sup>	2.3	2.2	7場3年間の平均値
網斑病罹病程度 <sup>2)</sup>	1.8	2.4	5場3年間の平均値
葉腐れ病罹病程度 <sup>2)</sup>	3.0	3.2	6場3年間の平均値
いもち病罹病程度 <sup>2)</sup>	0.9	2.0	2場2年間の平均値
放牧試験における年間乾物採食量(kg/a)	41.3	36.8	2場2年間の平均値
放牧試験における採食率(%) <sup>3)</sup>	45.2	45.1	2場2年間の平均値
乾物分解率(DM%)	38.6	40.4	九州農研の刈取り4回の平均値
粗蛋白含有率(DM%)	10.1	10.6	九州農研の刈取り4回の平均値
ADF含有率(DM%)	36.1	35.9	九州農研の刈取り4回の平均値

1) 1: 極不良-9: 極良。2) 1: 無, 極微-9: 甚。3) 放牧前後の前後差法により算出。

期待できる。

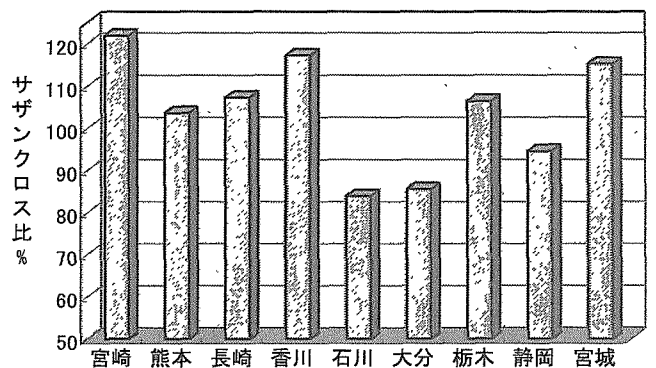


図 1. 各試験地における利用 3 年目の最終番草乾物収量の標準比